

## 暗闇の中の信仰

2010.3.9(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

### 引用聖句

ダニエル書 2章28節

「しかし、天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、この方が終わりの日に起こることをネブカデネザル王に示されたのです。あなたの夢と、寝床でああなたの頭に浮かんだ幻はこれです。」

ダニエル書 7章13節、14節

「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

ルカの福音書 11章33節、34節

「だれも、あかりをつけてから、それを穴倉や、桁の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。はいつて来る人々に、その光が見えるためです。からだのあかりは、あなたの目です。目が健全なら、あなたの全身も明るいが、しかし、目が悪いと、からだも暗くなります。」

初めに読んでいただきましたダニエル書の箇所は、本当に素晴らしい箇所ではないかと思えます。

ダニエル書 2章28節

「天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、この方が終わりの日に起こることをネブカデネザル王に示されたのです。あなたの夢と、寝床でああなたの頭に浮かんだ幻はこれです。」

終わりの日に起こることとは、いったい何でしょうか。言うまでもなく、「悪魔の怒り」を経験するのではないのでしょうか。私たちの敵は決して人間ではありません。「悪魔」です。

先日、御代田でも何箇所か引用しました。

ヤコブの手紙 4章7節

悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

エペソ人への手紙 6章10節、11節

…主<sup>たいのう</sup>にあって、その大能の力によって強められなさい。悪魔<sup>さくりやく</sup>の策略<sup>さくりやく</sup>に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具<sup>ぶく</sup>を身に着けなさい。

エペソ人への手紙 5章11節

実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。

コリント人への手紙・第二 2章11節

これは、私たちがサタンに欺かれなためです。私たちはサタンの策略<sup>さくりやく</sup>を知らないわけではありません。

ペテロの手紙・第一 5章8節、9節前半

身を慎<sup>つつし</sup>み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを獲<sup>さ</sup>ぎ求めながら、歩き回っています。堅<sup>かた</sup>く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。

悪魔も、再臨<sup>さいりん</sup>が近いと思っているのではないのでしょうか。ですから、救われた人々が何があっても用いられないように、と。

イエス様はいつ来られるのでしょうか。それは信じる者にかかっているのではないのでしょうか。イエス様のご再臨は、(何人救われているかと主は知っておられるのです。)この人数が満たされないと、ありません。ですから、最後の未信者のドイツ人、最後の救われていない日本人、イエス様を知らないエジプト人等々が導<sup>みちび</sup>かれるまで、イエス様は来られません。しかし、その数が満たされる瞬間<sup>しゅんかん</sup>に来られます。もちろん、それは今日かもしれません。そのために必要なのは、「悪魔に立ち向かいなさい」ということです。

このダニエル書2章を通して、聖書<sup>せいしょ</sup>は将来何が起るかを私たちにはっきりと教えています。主ご自身が世界歴史<sup>せかいれきし</sup>の支配者<sup>しはいしや</sup>です。王を立て、王を廃<sup>はい</sup>するの、すべて主の御手<sup>みて</sup>のうちにあることを教えるために、主は当時のネブカデネザル王に一つの夢をお見せになりました。

聖書<sup>せいしょ</sup>の預言<sup>よげん</sup>は、将来世界に何が起るかをはっきり告げています。主の与えられた預言を学び、それが預言されてから何百年後、また何千年後に、その預言通りに歴史<sup>れきし</sup>が成就<sup>じゅうじゆ</sup>されていくのを見ると、やはり驚<sup>おどろ</sup>くよりも、主の御前<sup>みづかみ</sup>に膝<sup>ひざ</sup>をかがめ、礼拝<sup>らいはい</sup>せざるを得ないのではないのでしょうか。

当時の世界を治めたネブカデネザル王が見た夢は、紀元前六百年からこんにちに至るまでの、いわゆる四つの帝国<sup>ていこく</sup>について預言しています。

\* 第一番目に夢の中で最初に出てくるのが、「金の頭」です。

これは、当時の世界帝国バビロンを現わしています。

\* 第二番目に夢の中で次に出てくるのは、「銀の腕と胸」です。

これは、次に続くメディアとペルシヤの国を表わしています。

\* 第三番目に夢の中に出てくるのが、「青銅の腹ともも」です。

これは、ギリシヤ帝国を表わしています。

\* 第四番目、「鉄でできたすね」の夢をみました。

これは、統一されたローマ帝国を表わしています。

ダニエル書 2章33節

「すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。」

ダニエル書 2章40節

「第四の国は鉄のように強い国です。鉄はすべてのものを打ち砕いて粉々にするからです。その国は鉄が打ち砕くように、先の国々を粉々に打ち砕いてしまいます。」

とあります。

バビロンの王であるネブカデネザルは、自分は世界の支配者ではなく、自分の上に、主の主、王の王がおられ、やがてバビロンは滅びるといふ夢を見ました。そして事実その通りになってしまったのです。

ネブカデネザルが見た夢の中には、やがて滅んでゆく四つの世界帝国ばかりではなく、その後永遠に続く国も入っていました。人手によらず切り出された石が、像の足を打ち砕いた時、像の全部が砕けて崩れ落ちたといふ夢も見ただけです。

夢を考えていきますと、世界歴史はだんだん良いほうに向かっているのではありません。だんだん世界の状態は悪くなってきています。初めは金であり、終わりは粘土となり、やがて滅んでしまうことがよく分かります。分裂して弱くなってしまいます。頭、胸、両手、両足、胴、みなばらばらになってしまいます。十本の足の指もばらばらになっていきます。黙示録には、十の角について、いろいろなことが書かれています。これももちろんみな同じ意味です。

このダニエル書2章に書かれている「人の手によらずに切り出された石」とは、やがて雲に乗って来られるご自身の御国をお造りになるイエス様を表わしています。聖書は、今の世界の情勢がだんだん良くなって神の国になるとは語っていません。一度破壊され、上から新しい神の国が地上に送られる、と聖書は語っています。もう一度7章を見てみましょう。

ダニエル書 7章13節、14節

「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、

年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

とあります。マタイ伝 24 章を見ても、同じ事実について書いてあります。

マタイの福音書 24 章 30 節

「そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見ます。」

しかし私たちがこのダニエル書全体を読むとき、もちろん最も大切なことは、その時の信仰を保ちながら、悪魔と戦っている人々を見ることではないでしょうか。

確かにヘブル書 11 章にいろいろな信仰の人々がたくさん書かれています。その中に名前は書かれていませんが、ダニエルまたダニエルの友だちのことに触れているのではないかと思います。

ヘブル人への手紙 11 章 33 節、34 節

彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

とあります。ここで「ししの口」、「火の勢い」とありますが、これはもちろんダニエル、またダニエルの友だちのことを言い表わしています。

ダニエル書の語ろうとしていることは、「暗闇の中での信仰」ということではないでしょうか。今私たちは、もうすぐイエス様がお出でになるうとしている末の世、最悪の世に生きているということは、疑いのない事実です。多くの人は、「世界はだんだん良くなるのでしょうか、悪くなるのでしょうか」と。もちろん、聖書を読むと、両方だと言えます。良いところはだんだん良くなり、悪いところはだんだん悪くなっていきます。

イエス様はご自分の教会を建て上げるために働いておられ、ご自分に属する人々を完全な者とするために、いろいろな苦しみや悲しみ、困難を通して練り、清め、ご自分の形に似せようとされています。これはだんだん良くなる面です。

これと反対に、サタンからのものは、ますます悪くなる一方です。主のみこころは、ご自身に属する者、主の恵みによって「み救いにあずかるようになった者」に傾き尽くされています。おもにダニエル書 7 章の中に、何度も何度も「聖徒」「聖徒たち」という言葉が出てきます。主がどんなにご自分に属する者を思っておられるかが書かれています。

良いところはますます良くなり、全きに向かっていきます。救われた者は成長し、神の国は成熟していきます。悪いものは、ますます悪くなり、悪の完成に向かっていきます。良

い面も悪い面も、すべての出来事の中心にイエス様の「からだなる教会」があります。

そして良い面も悪い面もあらゆる出来事は、「主のものとなった者」が、イエス様の御形に似る助けをしているのです。主のご栄光と主のご目的は、すべて、教会、「からだなる教会」に任せられています。全地、全天、地獄までが、救われた者が御子イエス様の御姿に変えられる助けをしているのです。

使徒行伝の中で、無実の罪で刑務所に入れられた二人の男パウロとシラスについて書かれています。彼らは鞭打たれ、凶悪犯罪者のように取り扱われましたが、彼らは決して、「どうして」、「なぜ」と考えようとしなかったのです。悪魔の勝利にはなり得ない、と確信したからです。簡単に書かれているのは、  
使徒の働き 16章25節前半

**真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、**

「真夜中ごろ」、一番暗い時です。

彼らは、なぜそのように導かれたのか理解できなかったでしょう。しかし、主は決して間違いをなさない。このような導きも自分たちにとって「最善の益となるに違いない」と彼らは確信しました。ですから、彼らは祈りつつ賛美の歌を歌うことができたのです。

イスラエルの民は、本来主のみ栄えを現わし、主の権威を証ししていかなければならない人々だったのですが、ダニエルの時代のイスラエルの民は、そのことからおおよそかけ離れた状態に陥っていました。当時のイスラエルの民は、主のご支配を証しするどころか、敵の手に渡り、捕らわれの身となって、外国であるバビロンにまで移されていました。

こんにちにおいても、同じではないでしょうか。即ち、主によって救われた人々は、国々の中で権威を持っているのでしょうか。主のご支配が私たちの真ん中に、さやかに現われているのでしょうか。私たちは、「悪魔の怒り」、「憎しみ」を感じるのでしょうか。戦っているのでしょうか。

エペソ人への手紙 6章12節

**私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。**

と、はっきり書いてあります。

エペソ人への手紙 3章10節

**これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、**

「今」、（明後日ではないのです。）「今日」です。つまり、ただ「救われるために」救われたものではありません。「主の道具として用いられるために」救われたのです。

こんにちの教会の証しは確かに弱くなっています。ゼロに近いものになってしまっているのではないのでしょうか。教会を通して主のご支配が現われるよりも、教会が、「目に見える世界」によって支配されているのではないのでしょうか。私たちが、御霊によって「妥協」することのない「主のご支配のもとにある証し人」となることができれば、本当に幸いです。

初代教会の断固たる態度は、ローマ書1章16節に書かれています。パウロの素晴らしい証しです。

ローマ人への手紙 1章16節

**私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。**

そうなるために、まず主のみこころが私たちの心となっていなければなりません。

ダニエルとその友だちは、「主のみこころを自分の心」としていた人々でした。このような人々は、今の時代においても最も必要とされている人々です。これらの人々は、主との深い交わりをなくした人々と、主との間を結ぶ帯のような役目をしてしています。これらの人々は、日々上から「主の新しい力」をいただいている人々です。

ダニエルとその友だちは当時、主から離れ、霊的に貧しくなり、墮落してしまったイスラエルの民のために、だれにも妥協することなく、常にとりなし続けました。眠っているイスラエルの民、信じる者と主とを結ぶ帯の役目をしていたわけです。ダニエルとその友だちのような人々を、主はこんにち探し求めておいでになります。このような人々がどうしても必要であるからです。

ダニエル書を読むと、ダニエルとその友だちは、同胞イスラエルの民が霊的に貧しくなり、役に立たなくなっていることをよく知っていた人々だったことが分かります。しかも彼らは聖書をよく知っていたのです。即ち、みこころは何であるか分かったのです。ダニエルとその友だちは、聖書をよく学んで知っていたので、みこころをよくわきまえていました。そして主のみこころを成就するために、自らを主に捧げていました。彼らは聖書を学んだのです。しかし、頭の知識を得るためではなくて、「主のみ思いを知るため」でありました。ですから、主のみ思いが彼らの内に宿り、彼らはみことばによって変えられたのです。

多くのキリスト者は、みことばを読んでも人格が変えられていきません。みことばは、お客様のように出たり、入ったりしています。ダニエルとその友だちの場合は違いました。みことばが彼らの心の内の主人となり、彼らを支配し、彼らは「みことばによって」主のみこころのままに変えられていきました。彼らは、主のみこころを知るや、少しも妥協することなく、主のみこころを成し遂げるために己を捧げました。その結果がどのようなだろうと恐れませんでした。火の炉も、獅子の穴も、彼らには問題ではなかったのです。

各時代<sup>かくじだい</sup>にあって、主はこのような人々を探し求めておられます。彼らは、主のご目的に心の目が開<sup>ひら</sup>かれた人々です。そして、彼らは眠っている信者と主との間のとりなし人となった人々です。

聖書の真理を、ただ学び、ただ聞き、ただ宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えるだけでは役に立ちません。聖書の真理が、「私たちから切り離<sup>きはな</sup>すことのできない、私たちのいのち」となっていなければなりません。よく引用する箇所は、歴代誌下<sup>れきだいしげ</sup>の16章9節です。

歴代誌・第二 16章9節前半

「主はその御目<sup>おんめ</sup>をもって、あまねく全地を見渡<sup>みわた</sup>し、その心<sup>こころ</sup>がご自分と全<sup>まった</sup>く一つになっている人々に御力<sup>みちから</sup>をあらわしてくださるのです。」

主は、主を第一にする人々を探し求めておられます。用いていただきたいと願う人々を必要<sup>ひつよう</sup>となさるからです。

私たちは、聖徒たちに対する主のみこころを知っているのでしょうか。また、この主のみこころにそって、みこころのままに造<sup>つく</sup>り変えられているのでしょうか。今、学びましたように、主のみこころが私たちの心に成<sup>な</sup>らないなら、主は私たちを用いることがおできになりません。

次の大切な点は、主のみこころを行なっていく人々、即ち主のご支配を受けている証し人は、「悪魔<sup>こうげき</sup>の攻撃<sup>こうげき</sup>の真<sup>ま</sup>っ只中<sup>ただなか</sup>」に置かれている、ということです。

ダニエルとその友だちは、どんな具合<sup>くあい</sup>に責<sup>せ</sup>められたでしょう。彼らの証しに対する報<sup>むく</sup>いは、決して生易<sup>なまやさ</sup>しいものではありませんでした。妬<sup>ねた</sup>みと憎<sup>にく</sup>しみと死<sup>し</sup>が、彼らを襲<sup>おそ</sup>ってきました。しかし彼らは少しの動揺<sup>どうよう</sup>も見せず、固<sup>かた</sup>く立<sup>た</sup>って動か<sup>か</sup>ず、次々とやってきた戦<sup>いくさ</sup>い(全部で六つの戦い)に、勝利者として勝ち進んでいったのです。

この六つの戦いは、ダニエル書1章から6章までの間に記されています。

\* 第1章に出てくる戦いは、「異邦<sup>いほう</sup>的な習慣<sup>じゅうかん</sup>や放<sup>ほう</sup>縦<sup>じゆう</sup>に対する主の節制<sup>せつせい</sup>の戦い」です。

主の側<sup>がわ</sup>につくダニエルとその友だちは、異邦<sup>いほう</sup>の若者<sup>わかもの</sup>より健康<sup>けんこう</sup>に勝<sup>まさ</sup>り、知恵<sup>ちえ</sup>も十倍<sup>じゅうばい</sup>勝<sup>まさ</sup>り、異邦<sup>いほう</sup>の習慣<sup>じゅうかん</sup>と放<sup>ほう</sup>縦<sup>じゆう</sup>に対して勝<sup>まさ</sup>りました。1章8節から20節まで読むと分かります。15節と20節だけ読みましょう。

ダニエル書 1章15節

十日<sup>とおか</sup>の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥<sup>こ</sup>えていた。

ダニエル書 1節20節

王<sup>み</sup>が彼らに尋<sup>たず</sup>ねてみると、知恵<sup>ちえ</sup>と悟<sup>さと</sup>りのあらゆる面<sup>めん</sup>で、彼らは国<sup>くに</sup>中のどんな呪<sup>じゆほうし</sup>法師<sup>し</sup>、呪<sup>じゆもんし</sup>文<sup>もんし</sup>師<sup>し</sup>よりも十倍もまさっているということがわかった。

とあります。

\* 第2章に出てくる戦いは、異邦の「迷信と魔術」に対する「主の知恵」の戦いです。

異邦の博士、魔術師たちは、自分たちの無力さを告白し、ダニエルは、全能なる主の力によって勝ち、主を賛美しています。

ダニエル書 2章20節から23節

ダニエルはこう言った。「神の御名はとこしえからとこしえまでほむべきかな。知恵と力は神のもの。神は季節と時を変え、王を廃し、王を立て、知者には知恵を、理性のある者には知識を授けられる。神は、深くて測り知れないことも、隠されていることもあらし、暗黒にあるものを知り、ご自身に光を宿す。私の先祖の神。私はあなたに感謝し、あなたを賛美します。あなたは私に知恵と力とを賜い、今、私たちがあなたにこいねがったことを私に知らせ、王のことを私たちに知らせてくださいました。」

ダニエル書 2章47節

王はダニエルに答えて言った。「あなたがこの秘密をあらわすことができたからには、まことにあなたの神は、神々の神、王たちの主、また秘密をあらわす方だ。」

と、王は認めざるを得なかったのです。

\* 三番目の戦いは、3章に出てきます。この戦いは、「偶像礼拝とまことの礼拝の間の戦い」です。

異邦の王でさえ、次のように告白せざるを得なかったのです。よく読まれる箇所です。

ダニエル書 3章27節から29節

太守、長官、総督、王の顧問たちが集まり、この人たちを見たが、火は彼らのからだにはききめがなく、その頭の毛も焦げず、上着も以前と変わらず、火のにおいもしなかった。ネブカデネザルは言った。「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。それゆえ、私は命令する。諸民、諸国、諸国語の者のうち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神を侮る者はだれでも、その手足は切り離され、その家をごみの山とさせる。このように救い出すことのできる神は、ほかにないからだ。」

\* 四番目の戦いは、4章に出てきますが、「異邦の王の傲慢に対する主なる神の支配の戦い」です。



異邦の王は気が狂い、主の御手によってそれが癒されたとき、次のように告白するようになりました。

ダニエル書 4章34節から37節

その期間が終わったとき、私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。すると私に理性が戻って来た。それで、私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。地に住むものはみな、無きものとみなされる。彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押えて、「あなたは何をされるのか。」と言う者もない。私が理性を取り戻したとき、私の王国の栄光のために、私の威光も輝きも私に戻って来た。私の顧問も貴人たちも私を迎えたので、私は王位を確立し、以前にもまして大いなる者となった。今、私、ネブカデネザルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。また、高ぶって歩む者をへりくだった者とされる。

全部素晴らしい証しです。

\* 五番目の戦いは、神の宮の物をかすめ奪う「主を侮る者」に対しての、「主を恐れる者」の戦いです。

ベルシャツアル王は、壁に書かれた文字の意味を知り、驚いてその晩死んでしまったのです。

ダニエル書 5章1節から4節

ベルシャツアル王は、千人の貴人たちのために大宴会を催し、その千人の前でぶどう酒を飲んでいました。ベルシャツアルは、ぶどう酒を飲みながら、父ネブカデネザルがエルサレムの宮から取って来た金、銀の器を持って来るように命じた。王とその貴人たち、および王の妻とそばめたちがその器で飲むためであった。そこで、エルサレムの神の宮の本堂から取って来た金の器が運ばれて来たので、王とその貴人たち、および王の妻とそばめたちはその器で飲んだ。彼らはぶどう酒を飲み、金、銀、青銅、鉄、木、石の神々を賛美した。

しかし、それだけではありません。

ダニエル書 5章22節、23節

「その子であるベルシャツアル。あなたはこれらの事をすべて知っていながら、心を低くしませんでした。それどころか、天の主に向かって高ぶり、主の宮の器をあなたの前に持って来させて、あなたも貴人たちもあなたの妻もそばめたちも、それを使ってぶどう酒を飲みました。あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しましたが、あなたの息と、あなたのすべての道をその手に握っておられる神をほめたたえませんでした。」

ダニエル書 5章30節

その夜、カルデヤ人の王ベルシャツアルは殺され、

とあります。

\* 6章にある六番目の戦いは、「悪意に対する主の守りの戦い」です。

獅子の口は主の力により閉ざされ、ダニエルは救われました。

ダニエル書 6章26節、27節

「私は命令する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震え、おののけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」

これらの戦いは、血肉に対する戦いだけではなかったのです。ダニエルとその友だちが祈った時、天国も地獄も揺り動かされました。ダニエルが祈りを始めた時、空中をつかさどる悪の霊が、ダニエルの祈りをつぶしてしまおうとして、ダニエルの祈りを妨げました。10章13節を見ると、次のように書かれています。

ダニエル書 10章13節

「ベルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をベルシヤの王たちのところに残しておき、」

ダニエル書 10章20節

そこで、彼は言った。「私が、なぜあなたのところに来たかを知っているか。今は、ベルシヤの君と戦うために帰って行く。私が出かけると、見よ、ギリシヤの君がやって来る。」

と書かれています。

けれど、ダニエルの祈りは地獄だけでなく天国にも届きました。天は天使の長ミカエルを送って、ダニエルを助け、勝利を与えました。

主のご目的が成就されないように、全国の集会上にも激しい悪霊の働きがあります。この恐ろしい悪霊の働きを身近に感じるこの頃、この恐ろしい現実を見つめ、主のみ前に立ち続け、祈り続け、やがて天の窓が開かれ、奇蹟を見るまで祈りたいものです。

主のみ栄えをこの目で拝し、主ご自身がご自分の教会を建て上げられるようにと望む者

は、どんなに何倍も熱くされた試みの炉に投げ入れられても驚きません。獅子の穴に投げ込まれても驚きません。「主のご支配」を受けた証し人、「主のみこころ」を自分の心とした人々は、悪魔の攻撃の真っ只中に置かれている人々で、この世から選び分かれた人々です。この世から選び分かれた人々は、主のご支配を受ける証し人です。

1章に戻りまして、ダニエル書1章8節によると、ダニエルとその友だちは、王の食物を食べることによって自分を汚すまいと、心に思い定めました。王にこのように申し述べ、王の機嫌を損ねてまで王の食べるものを食べないということは、極めて要領の悪い、駆け引きの下手なやり方です。「その食べ物は食べ慣れていないから」と言って、言い訳もできたはずです。

なぜダニエルと友だちはそのように心に思い定め、王に申し述べたかと言いますと、彼らは、少し妥協しただけでも自分の証しの力が薄れてしまうことをよく知っていたので、そのことを恐れたからです。もし彼らがこの世と妥協して、世人と同じく見られたいと思うなら、全能なる神が自らを支配しておられるという証しの力が、すぐになくなってしまうことは明らかです。彼らは、「妥協せず主の道を歩む」なら、主のみ栄えが現われる。もし妥協するなら、主のみ栄えは決して現われない、ということを彼らはよく知っていたのです。

結果はどうだったでしょう。主は、ダニエルとその友だちに、素晴らしいご自身の力をお示しになりました。ダニエルとその友だちは、人の憎しみ、悪魔の憎しみに打ち勝ち、輝かしい勝利をおさめました。多くのクリスチャンは世と妥協し、優柔不断になり、証しの力をなくしてしまっています。この世と妥協してしまった信者を通して、主はご自分のみ栄えを表わすことはおできになりません。

ダニエルの時代の主に選ばれた民イスラエルは、この世に例えられる異邦の国バビロンに魂を売ってしまいました。しかし、ダニエルとその友だちはそうではなかったのです。彼らはパウロと同じように思ったでしょう。ガラテヤ書6章14節です。

ガラテヤ人への手紙 6章14節

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

彼らは、絶えず主のご愛、主のご支配のうちに留まり続けましたから、主のご栄光は彼らを通して現われていったのです。「妥協せずに常に主に仕える」彼らは、ほかの人々に勝ること十倍ということが明らかになりました。

世から選ばれ、聖め分かたれるということは、主と一つになり、主の恵みと力を絶えず経験する結果をもたらします。この世と妥協して、魂がどっちつかずになってしまう者に

は、証しの力がなくなります。主を新しく拝しまつることができなくなってしまいます。

妥協したクリスチャンは、言い訳にパウロの言葉を自分勝手に解釈しています。「弱い人には、弱い者になった。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになった。何とかして幾人かを救うためである」と。パウロは決して妥協しなかったのです。この世と妥協し、軟弱な生活に慣れてしまっているキリスト者は、一つの魂も獲得することはできません。妥協は呪われます。不義と不法は、祝福を締め出します。

ダニエルの時代も今の時代も、全く同じです。どの時代でも悪魔が目指していることは、「信じる者を妥協させ、罪に引きずり込み、霊の力をなくし、証しの力をなくそう」とすることです。

ダニエルとその友だちは、汚れから身を避けました。悪魔は、自分が彼らの心を脅かすことができないことを知ると、今度は外から攻撃してきました。彼らは火の炉に投げ込まれたのです。

主はこんにち、教会に対する神のみこころをわきまえ知り、悪魔の攻撃が激しくとも妥協せず、自らを捧げ切る人々を求めておられます。これらの人々は、いつも主のご臨在を覚え、その祈りはいつも聞き届けられます。どんなに悪魔の攻撃にあっても、ダニエルは勇敢に証し続けたのです。主が彼を保っておられたからです。

もし、私たちが主の全きご支配の内に自らをゆだね、主のご栄光のみを自指して歩むなら、ダニエルの神は私たちと共に歩んでくださるに違いありません。

了